

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第4号／1986年（昭和61年）6月1日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL 03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL 0438-62-9121〕 発行人＝石井哲夫／編集人＝明峯邦夫

この二年をふりかえって 富所正子

のびろ学園に入って、ちょうど二年たったところで、今の心境など何か書いてもらいたいとお話をいただいた時、思わず一年と少しではなかったかしらと錯覚してしまった位あつという間の二年間という感じがしています。

この二年間に、実に色々な事が起こり、その度に学園の園長先生をはじめ、諸先生方の暖い御協力を得ながら、一つ一つ乗り越えて、現在こんなに平和に、安心して子供に接している自分が不思議に思える程で、入園当時ではとても考えられないことでした。

思い返せば、今から二、三年前の頃、それは苦悩の毎日でした。小さい頃は、わりとおとなしくて、人にキズをつけるようなことはしなかった子が、小学校五年生頃から精神不安定になりはじめ、親子の関係もうまくいかなくなり、養護学校の中学部に入ってから、ひどい登校拒否で、スクールバスのところまでの三百メートル位の道も座り込みで一時間もかかったり、バスの中では添乗員をかじるなど、ついにはタクシー通学になりましたが、学校の中では、不思議とおとなしくて、一步学校を出ると、私に向かって来て、私の手は、いつもひっかきキズ、体は、かじられたアザが、ついていない日はありませんでした。家では夜眠れない日も多く、とうとう私も自律神経失調症になり、子供も一カ月間梅ヶ丘病院に預っていただきました。

その直後、運良く、のびろ学園にお世話になることができたのです。

私は体調もよくなかったので、さびしいと

同時に、ホッとしていました。お蔭様で少しずつ、私の体もよくなり、今ではかなり健康になっております。

学園に入って初めの頃は、梅ヶ丘病院でいただいた薬のせいと、ものめずらしさとで、おとなしくしていましたが、一カ月もした頃教育方法の変化によって、自由に意志を表現しても怒られない、自由に行動出来るということになり、今まで自分を巻いていたタガが一気にはずれてしまい、今までためてきた、不満やら怒りなどがバクハツし、以前よりもひどく荒れるようになり、又々不安におのきました。その時の園長先生のお言葉が、「早く、自分にある本当のものを出してもらう方が、かえって指導する上で好都合」ということでした。私はただ学園を信じて、お任せしようと思いました。お薬（精神安定剤）もやめることにしました。

家庭生活、学園からの帰宅時等、非常に困難になり、学園にしばらく預っていただくこと約十カ月位、その間、月一回、家に帰る外は、日曜日の度に私の方から学園に逢いに行くという生活が続きました。そうしている内に、少しずつ少しずつ子供の様子が変わって行きました。家に帰っても部屋に鍵をかけて、一緒に居る事ができなかったのが、段々に中に一緒に居られる時間が長くなって、きびしい目つきも消えていき、入園一年後には、他のお子さんと同じに毎週帰宅出来るまでになりました。子供にとって本当に、適切な計らいをしていただいたお蔭と感謝しております。

（3ページ下段に続く）

施設職員とクライエント（収容されている人や子どもを言う）とで作りあげていく集団生活は、いろいろな側面から分析されなければならない。一つには、自立自働出来ないクライエントに対して、どのような援助サービスを具体的に提供するかという側面である。生活を共にしている職員とクライエントにそれぞれの行動の仕方があって、そこに種々の摩擦が生じてくることは止むを得ないとしても、常に職員側の考え方で律してよいわけではない。但し一定の社会における生活条件に適応する能力は、当然ながら職員の方が勝っていると言えるであろう。従って子どもの行動や状態を評価して目標をきめた活動は、サービスを提供する側に求められてくる。つまり大切なことは、職員側は、どうしても一方的な評価によって、クライエントに対して不都合な行動を演じることになるのである。そこで職員側に、強くモラルや自己規制を求めなければならない。非常にはつきりしている例は医師の患者に対するサービスである。医師はクライエントに対して、その命を預かっているわけであるから、その生命にかかわるあいまいな姿勢は許されない。強い倫理

規制が加わっている。しかしその他の職業はかなり放任されている状況である。

障害をもつ子が、職員によって不利な扱いをうけるようなことがあり、その先の生活を混乱させられ、生きがいを失うようなことがあったとしたら、それこそ医師と同様、生命にかかわる仕事をしていると考えるのもよい事態におかれているのである。このことは決して大げさなことではなく、事実、具合のわるい教師やセラピストに

見えざる敵との戦い

石井哲夫

出会い、不当な扱いをうけておかしくなったと思われる子に出会うことがあるからである。もちろんその当の教師や職員は、そのような事態を招いていることを知らず、相変らずおかしな考えによって、おかしなことをしているとすると、一体誰がこれに立ち向かっていくことになるのであろう。

最近クラスのいじめに加担した教師が問題とされている。本人はこのような深刻な事態を招くことを予想も出来ず、つい軽い気持ちで

やったのかも知れない。いじめられている子どもの不安や口惜しさがわからないだけでも教師失格であるが、その上、現に「いじめ側」に立つ教師がいるとは、何とも恐れいったことである。このことと関係があると思うもう一つの事実もついでに紹介しておこう。それは、ある調査の結果に（中学校のあるサンプル調査）、教師の感覚としていじめっ子よりいじめられっ子の方にマイナスを感じるという恐るべきものである。もちろんこ

れは全国調査ではないので特定の条件を付して考えなければならぬということかも知れない。それにしても、このような専門家といわれる集団の状況をもう少し考えていくことが必要になってきているのである。

私は、この専門家の非専門性を私自身の中に感じることがある。それは時折、まことに自分本位の考え方をして、それを子どもにむかっておしつけているのである。平生私が、言っていることとは逆

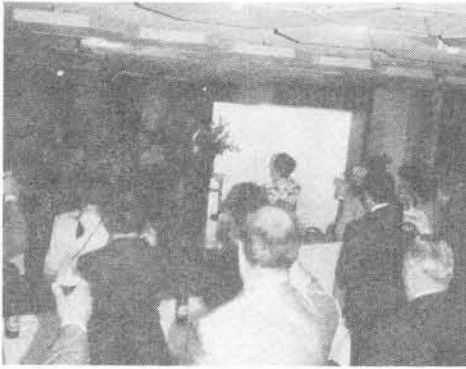
の事実が存在しているのである。時折夜半めざめて暗然とすることあり、自戒している。

つまり施設職員として社会的弱者であるクライエントにサービスを行う側として、何としても、自己の中の自分本位のサービス姿勢を点検して、その本質としてクライエントの人格の尊厳という真のクライエントの自立の意味を知るための努力を行うということである。もし嬉泉職員が、他の問題施設につとめたと仮定して、それが自然にわかるようになってくると思えるかどうか、このようなことから自己の不確かさを考えてもらいたい。

第八回嬉泉まつりバザーの御報告

バザー収益御報告

部 門	金 額
総 務	3 8 7, 9 4 2 円
献 品	6 4 1, 7 4 1
手 芸	2 6 7, 5 7 0
食 堂	4 2 0, 1 5 6
子どもコーナー	1 4 7, 0 5 0
おばけ屋敷	8 5, 9 2 0
委 託	9 5, 0 6 5
展 示	2 8, 4 7 0
計	2, 0 7 3, 9 1 4



二月十五日、東京霞ヶ関東京会館にて「社会福祉法人嬉泉・創立二十周年を記念する会」が開催された

嬉泉日録

- 一九八五年12月24～29日 育心会冬期合宿
- 一九八六年2月1～3日 第二回自閉症児治療教育実践講座（於・袖ヶ浦ひかりの学園 外林大作、石井哲夫、奥村幸子、山根美江子各氏の講義、指導実践等）
- 2月15日 法人創立二十周年式典、年報（第八号）発刊
- 2月23日 第八回嬉泉まつりバザー（於袖ヶ浦）
- 4月25日～30日 職員研修合宿
- （予定）
- 7月12～13日 第17回治療教育夏期セミナー（箱根）
- 8月7～9日 第3回自閉症治療教育セミナー（安田生命ホール）
- 7月末 育心会夏期合宿

第一部式典では、来賓の方々の御あいさつをいただき、又、須藤祐司副理事長からのお礼のことは、石井哲夫常務理事のビデオ上映を交えた活動報告がなされた他、永年勤続職員の表彰などが行なわれた。

式典に続いて祝賀パーティーが行なわれ、なごやかな雰囲気のうち、そこに歓談の輪が広がった。

式典、パーティーでは次の方々が御あいさつをいただいた。

山本政弘氏（衆議院議員）
出口晴三氏（都議会議員）

- 中沢 健氏（厚生省児童家庭局 障害福祉専門官）
- 斉藤健次氏（東京都福祉局障害福祉部精神薄弱課長）
- 小日向毅夫氏（葛飾区長）
- 石川和夫氏（世田谷区婦人児童部長）
- 佐野利三郎氏（全国社会福祉協議会常務理事）
- 妹尾 正氏（日本精神薄弱者愛護協会参与）
- 平田富太郎氏（日本社会事業大 学学長）
- 大島研三氏（日本大学医学部名誉教授・法人理事）
- 松島正儀氏（東京育成園理事長・法人理事）

その後、ますます感情もおだやかになり、「学園行かないの」という言葉が少しずつ少なくなって来ました。最近、しいの木養護の先生とお散歩も楽しみの一つになっているようです。先生に信頼の情を持っている様子がよく分り、今までの学校生活では、考えられないことであり、もう卒業なのが残念な気がします。

今、静かに家族と話している時、「お兄ちゃんがいないとさびしいね」と娘が言い、「今実は何をしているかな？」とポツリと主人が

……。あとは私が「そうねえ」といったきり。確かに難しい子供です。でも大切な我が子。家に帰った時は、精一杯、大事にしてあげたい。そんな気持ちのこの頃です。

でも、まだまだ色々な問題を持ち込もうと用意しているかもしれません。どうかこれからも、適切な御指導をよろしくお願い致します。

富所正子



嬉泉の新聞第二部

ひかりのタイムス

私の四分の一世紀

山岸 裕

私は、25さいの節目を去年迎えた。四分の一世紀生きた。

私にとって25歳、それは今までがむしゃらに生きてきた自分を見つめ直す、そんな年頃だ。

時々こう思う。
こんな私でも今まで健康で丈夫に生きてこれたのも、神様のおかげではないか。

この頃、宗教について私は深く考える。対人関係や将来について私は悩む。こんな時、宗教でも信じようか、そんな気にフトかられる。

宗教を信じてれば、心に柱ができて、不安やストレスに苦しむ事から解放されるんじゃないか。自閉症者の私は、ちよっとしたことでも緊張し、不安になる。そんな私に、宗教がピタリと似会っている。

そんな気がする。
本を出版すること

いよいよ、私は今年には、本を出版する予定だ。

この本が企画されて二年になる。この本を書いて、私がどう思ったか、読者の皆サンに中間報告する。

① まず親への見方が変わってきた。この本を書くまでは、私は親をいちいち自分に干渉する、うるさい存在にしか思わなかった。

ところが、自叙伝を執筆するプロセスで、親への見方が、徐々に変わっていった。(自叙伝を書いていると、今までと違った見方が出てくる。)自叙伝を書いていると、意外に母親が、私にとって重要な役割を果たしている。このごくあたり前の事に、私は気づかなかった。

そうだった、ごくあたり前の事を自叙伝を書く事を通して知った。この私も遅まきながら親孝行をするようになった。

黄昏時

童心にふと帰らせる夕焼けや秋の日に無心に戯れる子猫に心やすらぐ

これも、自叙伝を書いて、よかったと思う。

② 自分の人生の自己評価、狭い目から広い目で見る。

私の自叙伝は、書いてるうちにそんな狭い枠からはみ出していった。自分が、考えている事、物の見方を社会に伝えてく、エッセイ的なものに広がっていった。

でも、それはそれなりによかった。今まで狭い見方をしていたのが、自叙伝を書く事とおして広い視野で、考えるようになった。

例えば、この自叙伝を、書くプロセスで、昔の事を書くのだが、意外に、記憶がなくド忘れしたりしている。そこで、昔の事をよく知っている、親や先生に聴いたりしている。親からの目、先生からの目、いろいろな見方がある事を私は知った。

そんな事を自叙伝を書く事を通して知った。本を途中で投げ出さず書いててよかったと思う。この他いろいろ書きたい事があるがきりがない。

一ついえるのは、つらくても本が出来るという目標の為に努力してとりくむ、この仕事には充実感

がある。

しかし今は、山でいえば五合目あたり、頂上にたどりつくまでの道のりは遠い。でも頂上につくのを、私はひたすら目指す。

八十六年(昭和六十一年)に
どんな事やりたい

しいて一つあげれば、私と同世代とつきあいたい、と最近思う。

なぜ? 最近の私は、フツターの若者につきあいたいなそう思う。町角で、フツターの若者が話をしてるのを見て、俺もあいうふう話してみたいなと、自分から思うようになった。

それに、施設内の人間関係では最近あきたりない。

施設内の、人間関係では、あきたりないと最近そう思っている。それで外の人につきあいたい、私は思うようになった。

これをきっかけに、私は自分の視野を広げたい。

① これ以外は、特にやりたいと思う事はない。

② ただ、常に前に向いて、歩いて、未知のものに挑戦する姿勢はとどろける。そしてもっと社会とふれあって行きたい。

この二つの目標を実現させる為に、努力してとりくむしかない。落葉をたいて憂い忘れけり